

聴覚障害児童・生徒の情緒・社会性 — SEAI テスト日本語試訳から (その2) —

Social-Emotional Assessment of Japanese Students with Hearing Impairment: Tentative Translation of Meadow-Kendall Social-Emotional Assessment Inventories

相澤 宏 充

Hiromitsu AIZAWA
(福岡教育大学)

一宮 菜津子

Natsuko ICHINOMIYA
(福岡聴覚特別支援学校)

(平成27年9月30日受理)

本研究は、一宮・相澤 (2014) において試訳した児童・生徒用 SEAI を用いて、聴覚障害児の社会性・情緒について、聴覚障害児をもつ小学部児童 (高学年)・中学部高等部生徒計 139 名を対象に検討した。その結果、「社会的適応」「自己イメージ」については一部分布が異なるものの、原版とほぼ同様に計測可能であることが示唆された。

キーワード：聴覚障害 社会性 SEAI テスト

I はじめに

教育成果についてより正確な評価が求められる昨今、聴覚障害児の教育についてもそれは同様であるといえる。学習の成績・結果についての評価は当然であるが、実際の社会との関係性を考えてゆくならば、児童・生徒の社会性に関しても、PDCA サイクルの中で適切に捉え、教育に活かす必要がある。

聴覚障害児の社会性のアセスメント方法として、海外では、Meadow と Kendall (1980) の開発した Meadow-Kendall Social-Emotional Assessment Inventory for deaf students (SEAI) が、情緒・社会性を把握するために頻繁に使用されている。このテストは「社会的適応」「自己イメージ」「情緒的適応」の3因子、計59項目から構成されている。また、他者評価であることから、簡便に利用できるという利点がある。

一宮・相澤 (2014) は、この児童・生徒用 SEAI テスト (原版) を、都築 (2007) によって作成された日本語版幼児用 SEAI テストを参考に、翻訳 (試訳) し、少数であるが高等部生徒に試行的に実

施した。その結果、高い信頼性を示す結果となった。

今回の研究では、小中学部生のデータを加え、更なる検討を行ってゆくこととする。

II 目的

本研究では、一宮・相澤 (2014) において日本語に翻訳 (試訳) した児童・生徒用 SEAI テストを引き続き試行的に実施し、聴覚障害児の情緒・社会性へのアセスメント可能性について検討することを目的とした。また、今回は小中学部生児童・生徒を対象とした分析も実施する。

III 方法

1. 対象児

聴覚障害児の教育課程をもつ4つの特別支援学校に在籍する小学部児童 (高学年)・中学部高等部生徒計139名を対象とした (重複障害児は除く)。

2. 手続き

一宮・相澤 (2014) と同様、実施の手続きは以

Table 1 各因子の平均値（小中学部）

	性別	SEAI原版(7-15)			小中学部		
		平均	SD	N	平均	SD	N
第1因子「社会的適応」	M	2.85	0.50	692	2.90	0.48	37
	F	3.02	0.51	540	3.17	0.39	42
第2因子「自己イメージ」	M	3.04	0.45	605	2.84	0.39	41
	F	3.10	0.48	477	2.94	0.38	42
第3因子「情緒的適応」							
		3.25	0.45	1231	3.43	0.34	86

* p<.05 ** p<.01

Table 2 各因子の平均値（高等部）

	性別	SEAI原版(16-21)			高等部		
		平均	SD	N	平均	SD	N
第1因子「社会的適応」	M	2.96	0.54	444	2.97	0.40	60
	F	3.12	0.46	395	3.06	0.40	37
第2因子「自己イメージ」	M	2.97	0.48	358	2.82	0.43	59
	F	3.06	0.44	317	2.81	0.43	35
第3因子「情緒的適応」							
		3.31	0.44	811	3.33	0.33	102

* p<.05 ** p<.01 Table 1 とは異なり、本研究と一宮・相澤(2014)の結果を併せたものの差の有意差を示した。
分析手法統一のため一宮・相澤(2014)から欠測値があった因子の得点を全て取り除いたデータを示している。

下の通りである。他者評価形式の検査であるため、評価を被験児の担任教師に依頼した。回答は「とてもあてはまる（4点）」から「全くあてはまらない（1点）」と「評価不能（得点化しない）」の5件法で行った。質問紙の表紙に「特定の児童・生徒の行動を観察した上で、それが各項目の記述にあてはまるかそれぞれの項目をよく読んで回答してください。その児童・生徒に項目の内容があてはまるかどうかは聴覚障害の有無に関係なく、同じ年齢の子どもを基準にしてください。聴覚障害児のみに限定されるような項目は、あなたの知っている同じ年齢の聴覚障害児を基準にして回答してください。クラスの中の児童・生徒のみを基準にしないでください。また、その子の最も良い状態で判断してください。」という注意書きを記載した。

3. 分析

一宮・相澤(2014)と欠測値及び評価不能の扱いを変更した。原版の分析と詳細に比較するため、原版同様、欠測値があった因子については分析から取り除いた。これは、例えば対象児aが第1因子に欠測値があった場合、欠測値のない第2、第3因子のみ分析に使用したという意味である。

また、一宮・相澤(2014)では、高等部生徒・専攻科生徒70名を対象としていた。今回の分析では、分析人数を増やすために、本研究の高等部生徒にこの先行研究の対象者のデータも加えて、高等部生徒群として扱うこととした。

IV 結果と考察

(1) 信頼性

それぞれの因子の α 係数を算出した。小中学部児童・生徒で第1因子「社会的適応」、第2因子「自己イメージ」、第3因子「情緒的適応」が、それぞれ、.90, .85, .66, 高等部生徒は、.85, .90, .78であった。小中学部児童・生徒の第3因子が若干低い傾向にある。このことから、現時点では、第

3因子「情緒的適応」の利用には注意が必要であろう。今後、対象児童・生徒を増やし、因子構造について確証を行ってゆくことが理想的である。もちろん、 α 係数の高い傾向から、聴覚障害児における社会性はアメリカでも日本でも同様の尺度で捉えられることを、基本的には示していると考えることができる。

(2) 各因子の平均値

各因子の平均値について、Table 1, 2に示した。第2因子「自己イメージ」については、本研究が原版と比較して、有意に低い値となっている。また、その傾向とは異なり第3因子「情緒的適応」については、小中学部児童・生徒では高いものの、高等部生徒ではほぼ同程度の値となっている。

第2因子「自己イメージ」を検討するためについて、各質問項目の平均値の分布をヒストグラムに表した（Fig. 1）。「補聴器をしている見知らぬ人や訪問者に一体感を抱く（例、興奮した見方を

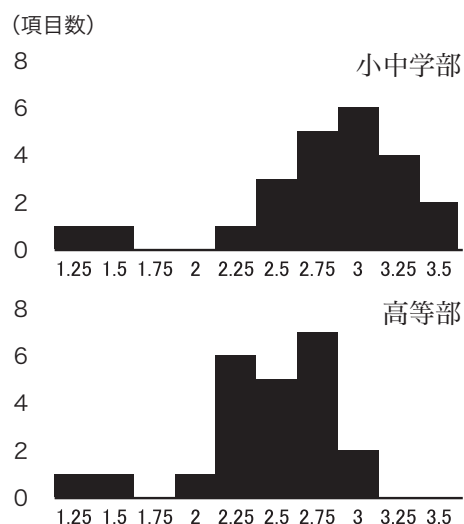


Fig. 1 第2因子「自己イメージ」項目の平均値の分布

Table 3 小中学部と高等部の比較

	逆転 項目	性別	小中学部		高等部			
			平均	SD	平均	SD		
第1因子「社会的適応」								
攻撃的である。けんか早く、引っかいしたり、かんだりする。動物をいじめる行動も含まれる	▽	M	2.95	0.94	3.43	0.74	↑	**
通常は受け入れられる感情的な反応を示している。激怒(かんしゃく)や暴力がでるのは、過度な挑発等本人を怒らせるような事柄の原因の後のみである		F	2.88	1.13	2.30	1.41	↓	*
他の児童・生徒をからかったり、いらだたせたり、困らせる	▽	M	2.68	0.85	3.05	0.87	↑	*
他者の感情を理解しているようだ。共感を示す		F	3.17	0.58	2.89	0.57	↓	*
優しく、思いやりがある		M	3.19	0.46	3.43	0.59	↑	*
第2因子「自己イメージ」								
孤立している。友達がいない。引っ込み思案と考えられる	▽	M	3.69	0.61	3.27	0.71	↓	**
		F	3.54	0.60	3.09	0.78	↓	**
手話を使用している見知らぬ人がいると興奮し、好意的な反応を示す		M	1.51	0.82	1.97	0.80	↑	**
クラスや集団の活動に参加し、議論のなかで自分から答えたり、意見を出す		F	3.15	0.71	2.69	0.93	↓	**
他の児童・生徒からリーダーであると思われている		F	2.67	0.87	2.26	0.89	↓	*
第3因子「情緒的適応」								
潔癖さに対して非常にこだわりを持つ。常に手を洗ったり、ほんのわずかなごみや汚れを我慢できない	▽	-	3.73	0.50	3.31	0.74	↓	**
ささいな細部に非常に関心を示したり、夢中になる(例文を書いたり絵を描いたりするとき完璧さを求める	▽	-	3.10	0.87	2.84	0.76	↓	**
手話言語に対して、否定的な態度を示す(手話を拒否し、他者の手話が分からないふりをする)	▽	-	3.84	0.40	3.65	0.55	↓	**

* p<.05 ** p<.01 一宮・相澤(2014)の抽出データと本研究結果を併せたものを高等部として示した。

する)」「手話を使用している見知らぬ人がいると興奮し、好意的な反応を示す」項目が、一宮・相澤(2014)と同様に低い値となっている。被検児は、障害の有無に関係なく人と接することを示しているのではないだろうか。これは、アメリカと日本の文化や環境の違いから得られた結果の可能性がある。原版のローデータが記載されていないため不明であるが、これらの項目を含め、文化差の存在から、項目の内容について検討する必要性が考えられる。

また、この「自己イメージ」については、米国においても7-15歳と、16-21歳で値のわずかな低下が見られるが、本邦では、女子のみ大きな低下となっているという結果が特徴的である。

(3) 質問項目

質問項目ごとに比較を行った。59項目あるため、ここでは特徴があった項目のみ挙げる。第3因子「情緒的適応」の逆転項目である「手話言語に対して、否定的な態度を示す」という質問では全学年にわたって高得点であった。特に小学部児

童では、平均値が3.97、標準偏差が0.3であり、ほとんどが「全くあてはまらない」という評価を得ていた。本研究の調査対象は特別支援学校に通う児童であったため、学校外の経験が少ないことから高得点につながった可能性もあると考えられる。

逆に、全学部の対象者ともに評価点の平均値が1点台と低得点であった項目を挙げると、先ほど挙げた第2因子「自己イメージ」の「補聴器をしている見知らぬ人や訪問者に一体感を抱く」「手話を使用している見知らぬ人がいると興奮し、好意的な反応を示す」が当てはまっているが、それ以外にも、第1因子「社会的適応」の「クラスメートの行ったことは模範しようとせず、考慮に入れない」という質問項目が当てはまった。この項目については、訳出に問題があったと見るべきで、やや意識となるが「クラスメートの勉強をまねしてすまそう、他の人のやり方でごまかそう、ということはしない」とすべきであったと考えられる。修正が必要だろう。

(4) 小中学部と高等部の比較

小中学部児童・生徒と高等部生徒で回答項目の平均値に差があるものを、それぞれの因子で抜き出した (Table 3)。

第1因子「社会的適応」では、性別によって年齢による差が異なって現れている。男子では、「攻撃的である、けんか早く、引っかかり、かんだりする。動物をいじめる行動も含まれる」「他の児童・生徒をからかったり、いらだたせたり、困らせる」といった攻撃性に関する項目 (逆転項目) の得点が上昇し、社会的適応が進んでゆく傾向が見られている。他方、女子は「通常は受け入れられる感情的な反応を示している。激怒 (かんしゃく) や暴力がでるのは、過度な挑発等本人を怒らせるような事柄の原因の後のみであ

る」「他者の感情を理解しているようだ。共感を示す」の項目は、理由が不明であるが、低下している。

第2因子「自己イメージ」で、特徴的なのは、「手話を使用している見知らぬ人がいると興奮し、好意的な反応を示す」が高等部の男子生徒で上昇していることである。この項目は、上で見たように、そもそも点数が低いが、高等部になり手話を使用する他者への態度が若干変容していることを示している可能性がある。またそれ以外の3つの項目の得点は低下しており、上で述べたように、特に女子の低下が見うけられる。

(5) 各児童・生徒の因子毎の平均値の分布

最後に、児童・生徒の因子毎の平均値の分布を、各因子について図示した (Fig. 2, 3, 4)。

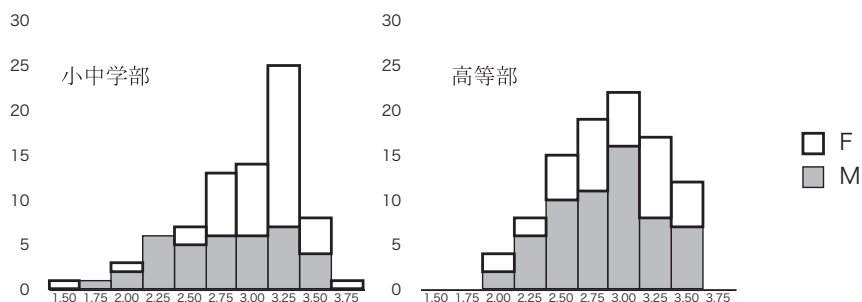


Fig. 2 児童・生徒の因子の平均値の分布 (第1因子「社会的適応」)

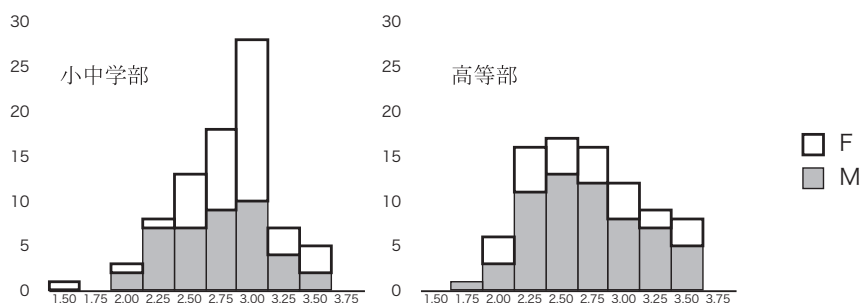


Fig. 3 児童・生徒の因子の平均値の分布 (第2因子「自己イメージ」)

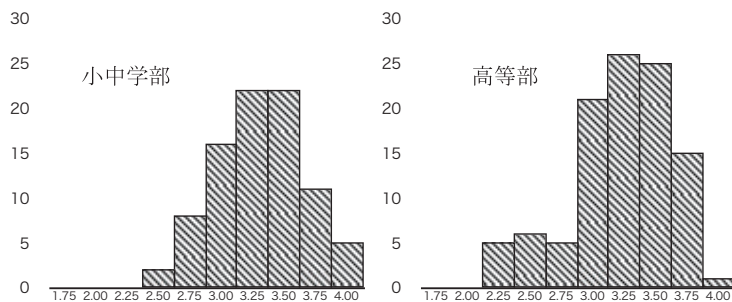


Fig. 4 児童・生徒の因子の平均値の分布 (第3因子「情緒的適応」)

これらの結果から、高等部生徒女子は小中学部児童・生徒に比較し、どちらの因子においても、平均値の分布が高い方から低い方へ推移していることが伺える。高等部生徒男子は、「社会的適応」は高い方へ、「自己イメージ」は低い方へ分布が偏っている傾向がある。

また、すべての因子の箱ひげ図 (Fig. 5, 但し、原版は 10, 30, 70, 90% ile 値のみ記載されているためそれを用いて作成) をみると、全体的に 90% ile 値は、原版の方が高いケースが多く、そもそも本邦の教師よりもメリハリのある回答傾向が見られる。本研究の高等部生徒女子の「自己イメージ」がかなり下方に伸びていることもはっきりと見いだせる。

V まとめ

本研究では、一宮・相澤 (2014) において日本語に試訳した SEAI テストの対象児を増やしその結果の特徴について分析した。結果から、以下のような考察が可能である。

1. 「社会的適応」, 「自己イメージ」, 「情緒的適応」の3因子ともに児童・生徒とも高い信頼性を示した。前の2つの因子は特に高かった。「社会的適応」の1項目に訳出の不備があったものの、

それを修正すれば暫定的に、ほぼそのまま利用可能と考えられる。「情緒的適応」については、小中学生児童・生徒について α 係数が若干低い傾向を示したので、利用は可能だが、今後項目の精査が必要である。

2. 「自己イメージ」では、アメリカのデータより得点が低い傾向がみられた。因子の平均値が原版より若干低い値がでることを念頭に活用すべきである。なかでも、高等部女子生徒が低い傾向にあった。各項目の文化差を含めた検討が課題となる。

引用文献

- 一宮菜津子・相澤宏充 (2014) 聴覚障害生徒の情緒・社会性 — SEAI テスト日本語試訳から —. 福岡教育大学紀要, 63 (第4分冊), 109-114.
- Meadow, K. P., Karchmer, M. A., Petersen, L. M., & Rudner, L. (1980) Meadow Kendall social-emotional assessment inventory for deaf students : Manual., Washington, D. C. : Gallaudet College, Programs.
- 都築繁幸 (2007) 聴覚障害幼児の情緒・社会性に関する一考察. 愛知教育大学研究報告, 56, 19-25.

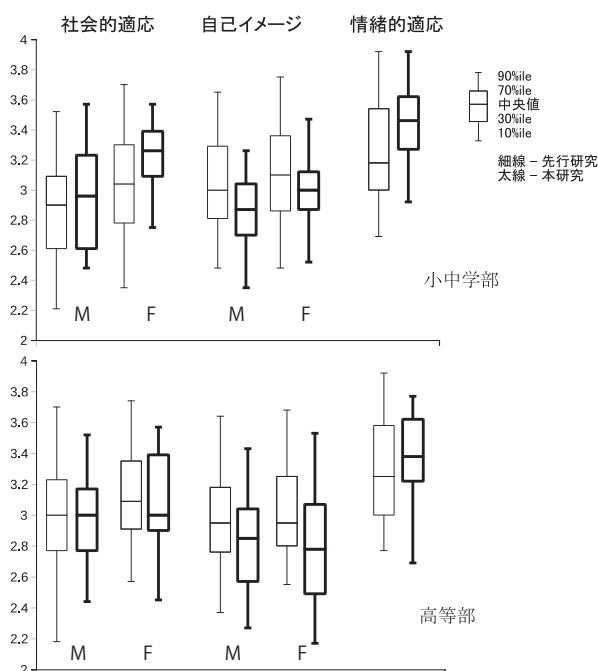


Fig. 5 児童・生徒の各因子平均値の分布 (先行研究との比較)
注. 先行研究に合わせたため、パーセンタイル値が通常の箱ひげ図と異なっている。

